

# これまでの笑顔の軌跡

一番はじめに訪れた時（左上）は男子学生3名だけだったが、そのうちゼミとして関わるようになり、ゼミ生11名で山林作業の体験やフィールドワーク調査を行った。この時の調査を通してまとめた研究成果は、神戸市公園緑化協会さまより2度も賞をいただくことができた。

それに加えて、現在では40名近くの学生が下唐櫃に訪れ、都市近郊林をもつ農山村の抱える問題やその他にも森林に関することを多く学ばせていただいている。

私たちのような学生ができることは限られているかもしれないが、社会の中で唯一、損得勘定抜きで地域と関わることのできる存在なのではないだろうか？

また、そのような存在であるからこそ、より多くの人々を繋ぐことができる可能性を秘めていると信じたいし、そうであって欲しいと思う。



# からの幸

神戸の市街地から、およそ10km程離れた場所にある唐櫃では、  
とても神戸とは思えぬ程、自然の恵みに溢れている。

経済学で市場原理を学ぶ私たちにとって、ついつい、このような自然の恵みを効率的に、利潤を生み出すためには、どのような活用方法があるのかと考えてしまいがちである。

きのこ狩りのお手伝いに参加させていただいた際、惜しげもなく私たちにきのこを全て振舞って下さった姿をみて、単に太っ腹であるとかそういったことではなく、清々しい人間的な生き方を見せられたように感じた。

自然と関わって生きる人たちと出会い、お金では買うことのできない、素敵な価値が眠っている。下唐櫃で様々な人と出会い、そう感じるようになった。



# 頼りになる、からとのじいじたち

平成26年、私たちが3回生の頃に、ここ下唐櫃に初めて訪れた。

東灘区で生まれ育った私にとって、いつも北側に見えていた六甲山の向こう側は未知の世界であった。幼少期の頃は、あの山の向こうには日本海があると勘違いしていた。

そんな未知の正解で見た景色は何もかもが新鮮で、山に生きる人がとてもカッコよく見えた。

調査を通して、そんなカッコいい人たちが抱える問題を知った時、とても驚愕した。その問題は非常に深刻で、学生の私たちがぱっと思いついたアイデアですぐに解決できるほど、容易な問題ではなかった。

他方で、企画コンペ等で華々しく活躍している学生に対して、私たちは一緒に悩み考えることしかできない状況に対して、大変苦悩した。

色々考えていく上で、この問題に対して、これからはずっと一緒になって考えていくことが、私たちにできることではないだろうか。

好きの反対は嫌いではなく、無関心という言葉が、私たちの出した答えだ。

